



Newsletter

The University of Tokyo Center for Pacific and American Studies

Vol.5 No.2 March 2005

巻頭言：「彼理（ペルリ）とPerry（ペリー）」展とこれからのCPAS

油井大三郎…………… 1P

特集：「彼理（ペルリ）とPerry（ペリー）」

——交錯する黒船像——展開催記念レセプション

開会の辞：油井大三郎…………… 2P

挨拶：浅島誠…………… 3P

祝辞：古田元夫…………… 3P

乾杯の辞：嘉治元郎…………… 4P

祝辞：近藤誠一／Mark Davidson／中原伸之

井上正幸／松井大英／久野明子…………… 5P

挨拶：加藤友康／義江彰夫…………… 10P

閉会の辞：木畑洋一…………… 11P

特別寄稿

「日米関係書」蒐集の思い出：佐伯彰一…………… 12P

Dying In Japan：Allan Kellehear…………… 13P

歓迎——クリスティン・ニコルズ客員教授…………… 14P

スタッフ・エッセイ

パークレー 2001年10月：木畑洋一…………… 15P

研究セミナー参加記

Towards an Asian American Historiography

飯島真里子…………… 17P

政治思想としての経済学——占領下における

「もう一つの」日米協力…………… 17P

川口悠子…………… 17P

奴隷制の歴史と歴史家の営み…………… 18P

大八木豪…………… 18P

進歩派国際主義の伝統…………… 19P

木下順…………… 19P

フェミニズムの歴史・現在・未来…………… 20P

浅井理恵子…………… 20P

セーラム魔女裁判の新しい物語への道程…………… 21P

荒木純子…………… 21P

2004年度研究活動報告…………… 22P



「彼理（ペルリ）とPerry（ペリー）」展とこれからのCPAS

東京大学大学院総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センター長

油井大三郎

昨年、2004年が日米和親条約締結150周年であったのを記念して、CPAS（アメリカ太平洋地域センター）では、昨年10月3日から14日まで駒場キャンパスの美術博物館で開国関係の展示会を行いました。この号にはこの展示開始の前夜に行われたレセプションの様態を採録しましたが、多くの皆さんからCPASに寄せられた期待の大きさに身の引き締まる思いがしました。

今回のペリー展示はかなりの予算を必要とするものでしたが、まずはマサチューセッツ工科大学との提携に基づいて、日本の他大学や地方自治体などと連携がとれたこと、その上、東京大学内の他部局の協力や総合文化研究科の全面的支援がえられた上、アメリカ研究振興会等の助成が加わったことが成功の原因でした。このような多角的な協力関係の構築は、法人化により財政難

に直面しているCPASの今後の発展方向を示唆するものと思います。

さて、2000年4月にアメリカ研究資料センターがCPASに改組されて以来、5年の歳月が経過しました。改組にあたって10年の期限がつけられましたので、丁度折り返し点にさしかかったこととなります。その上、2004年4月の国立大学の「法人化」による激変は、CPASのような研究科附属の小規模組織には予想以上に厳しいものでありました。それだけに、これまでの経過を踏まえて、将来への展望を、やや私見も交えて、明確にしておきたいと思います。

改組後のCPASでは、研究部門と図書部門の二本立てで活動を進めてきましたが、研究面ではかなりの成果をあげてきたと自負しています。まず、1998年から2002年までの5年間、文部科学省科学研究費・特定領域Bの助成による「米

国太平洋変動」プロジェクトを推進しましたが、その成果は、昨年から今年にかけて講座『変貌するアメリカ太平洋世界』全6巻として彩流社から刊行しました。また、この間、通常の出版活動以外に国際シンポジウムを2回開催し、英文の報告書を3冊刊行しました。その他、『アメリカ太平洋研究叢書』としてこの間、東京大学出版会から既に7冊もの専門書を刊行しました。

このような研究部門の活動は、参加された多くの研究者の皆さんの献身的な協力とともに、科学研究費やアメリカ研究振興会などからの助成によって可能になったものであり、改めて感謝の意を表します。今後も当センターの研究活動は外部資金の導入によって益々発展することが望まれます。また、総合文化研究科全体が「中期目標」に掲げている「グローバル研究共同体」構想に連

携させて、CPASが2010年以降にも存続できる道を開拓してゆくことが不可欠でしょう。

他方、図書部門に関しては、図書購入や司書雇用に対する文部科学省からの直接的な補助金が「法人化」によって廃止されたため、大きな困難に直面しています。それに対しては、総合文化研究科からの校費手当や科学研究費によって部分的に補填してきましたが、この分野への外部資金の導入が難しいた

め、今後は図書部門の縮小が避けられないと思います。

しかし、過去、40年近く図書館を維持し、日本における米国研究のセンター的機能を果たしてきたことや現在でも毎年、学外者も含め5000人近くの利用者があることも考えなければなりません。幸い、近年は、電子化や円高が進んだ結果、英文の新刊書の入手が比較的容易になったこともあり、今後のCPASは、マイクロフィルムや電子情報などによる

一次史料や定期刊行物の系統的な収集など、より一層「専門図書館」としての性格を強めてゆく必要があると思います。その結果、図書館の開館日・時間の縮小など、利用者の皆さんにご不便をおかけすることも起こりえますが、当センターとしては最低限の図書館機能は維持しつつ、研究センターとしての発展を期してゆきたいと考えていますので、今後も一層のご理解とご支援を御願ひする次第です。

特集

「彼理(ぺるり)とPerry(ペリー)—交錯する黒船像」展開催記念レセプション

「彼理とPerry」展を記念して、2004年10月2日、東京大学大学院総合文化研究科学国際交流ホールにて公開シンポジウムが開催され、終了後、駒場ファカルティハウスにて記念レセプションが開かれた。

開会の辞

東京大学大学院総合文化研究科附属
アメリカ太平洋地域研究センター長

油井 大三郎

本日は、お忙しい中、「彼理(ぺるり)とPerry(ペリー)—交錯する黒船像」展の開催を記念するレセプションにご参加いただきまして、本当にありがとうございました。ご承知のように、今年が日米和親条約締結150周年ということで、何かの企画を考えていたところ、マサチューセッツ工科大学(MIT)のジョン・ダワー先生から、MITのほうで作られた「開国を巡る日米のイメージギャップ」をビジュアルに対比するような企画が提案されてまいりました。最初、東大だけで引き受けるといのは予算的にちょっと重い仕事だと思ったのですが、幸い、今日は下田の了仙寺の松井住職がお見えですが、この下田や長崎大学、それから横須賀、函館といった、開港にゆかりの地の地方自治体や大学関係者の方々がこぞってご賛同くださいましたので、だいたい5ヶ所ぐらいで巡回展示ができるという見通しがたってまいりました。

また、せっかく東大でやるのであれば、東大の史料編纂所がたいへん貴重な資料をお持ちなので、そういうものもお借りして、MITと東大の合同展の形でやり

たいというふうに思いました。ただ私どものセンターは、専任の教師が4人しかいない大変小さなセンターでございますので、財政的にも、センターだけではできませんでした。そこで1つは今日、中原理事長がお見えですけれども、アメリカ研究振興会からの助成をいただいたり、浅島学部長以下、学部長室からもたいへん強いバックアップをいただいたお陰で実現しました。その上、一番大きな目玉は史料編纂所がお持ちの「ペリー渡来絵図貼交屏風」という今日の展示会の中央部に飾られている屏風がございますけれども、本物は特別収蔵庫に収められておりまして、なかなか門外不出で、普通は簡単には見られない物と聞いております。それを私どもは本物とほとんど違いがないレプリカを、学部長室などのご支援をいただいて展示できたことを、たいへん感謝しております。

大学には美術館のようなものがぜひ必要だと思いますが、今まで日本の大学は教育機能だけで手一杯で、美術館を充実させるというようなことは、なかなか夢のまた夢だったと思います。しかし駒場の場合には新しい美術館が出来て、そこでいろいろな展示ができるようになったおかげで、私どものセンターとしても展示に取り組むことができました。しかし、展示をするのは初めての経験でありまして、まったくノウハウがありませんでしたが、美術館の方で蓄積され

ていたノウハウが非常に強力なバックアップになりまして、こういう展示が無事にできたことを感謝しております。

今回すでに多くの方がご覧になってお気づきだと思いますが、黒船がやってきて日本と交渉した場には、アメリカ側はハイネという絵師を連れてきていました。日本側でもいろいろな場面が絵に描かれているわけですが、同じ場所が描かれたのに、これ程描き方が違うのかという点にお気づきになったと思います。つまり、人間は「自分の文化」という眼鏡を通じてものを見ているから、同じものを見ていても見方が全然変わってくるということがよく言われます。ですから、日米はこんなに親しくなっていますけれども、依然としてコミュニケーション・ギャップみたいなものが存在するので、そういうギャップをどうやって埋めていったらよいかということを考える場としても今回の展示はたいへん貴重だと思います。

今日は外務省から近藤広報文化交流部長がお見えになっており、またアメリカ大使館からはカルチュラル・アタッシェのディヴィッドソンさんもお見えですが、こういうささやかな展示ですが、文化交流を通じて日米間のコミュニケーション・ギャップを少しでも埋める上で役立つことができれば、私どもセンターとしてもたいへん幸いに思っています。

今日はお見えいただきまして本当にありがとうございました。

挨拶

東京大学大学院総合文化研究科長
浅島 誠



浅島誠 東京大学大学院総合文化研究科長

総合文化研究科長の浅島です。本日は「彼理とPerry」展の展示会とそれからシンポジウム、本当におめでとうございます。日米和親条約から150年というこの機会に、東京大学として、あるいは駒場として、このような催し物を開催することができ、本当に嬉しく思っております。今、油井大三郎センター長のお話にありましたように、我々日本人にとって今日ではアメリカは非常に近いようですが、また色々な意味で、文化と歴史、見方というものの違いが今日の博物館の展示会でも見られたわけです。今の油井センター長のお言葉に返れば、「見る眼鏡」によってその対象物さえも違うということをもさまざまと僕自身、今日感じまして、色々な意味で文化と経験、見方や考え方というものの重さというか、あるいは歴史の重要さというものをいま感じている次第です。そして日米和親条約が結ばれてから現在までの150年間にこのような、ある面で言うと我々の新しい文化や歴史が築かれているということに対して、深い感慨の思いを抱くものであります。そこにはやはり人というものがありまして、どういう人がそこにいたか、あるいはどういう人がそれをサポートしたかということによって文化や歴史というものは変わるのではないかと思うわけでありまして、この駒場の地には、油井先生をセンター長としたアメリカ太平洋地域研究

センターというものがありますけれど、これは非常にかげがえのないものでありまして、法人化によってもこのセンターは教養学部としてはぜひ残したいと思っているわけでありまして。東京大学もこの4月から法人化され、大学の内外で大きな変化がおきていますが、そういう時に色々な意味で、先ほども出ました東大の史料編纂所とかその他色々な場所で保存し、整理されている貴重な資料が一同に集められ、日本の知的財産を展示できたということは非常に意義深いものと思っております。私は大変喜んでおります。これを機会にさらに日米がよい意味でのパートナーとなりまして、お互いの文化を高めあい、次の新しい日米関係の礎となっていくらというふうにも思っております。どうも今日は本当におめでとうございました。

祝辞

東京大学総長代理・副学長
古田 元夫



古田元夫 東京大学総長代理・副学長

ご紹介いただきました古田でございます。今回の「彼理とPerry——交錯する黒船像」の展示会の開催に当たりまして、東京大学を代表いたしまして、一言ご挨拶を申し上げたいと思っております。

まず今回の意義ある展示会の共催者として「黒船とサムライ」展の貴重な資料を提供していただきましたマサチューセッツ工科大学及び、今回の展示会のご後

援をいただきました外務省、アメリカ大使館、アメリカ研究振興会、国際交流基金日米センター、読売新聞社に、東京大学といたしましても心よりの御礼を申し上げます。

ご案内の通り、この駒場の東京大学大学院総合文化研究科・教養学部はアメリカ研究に長い伝統を持っております。現在のアメリカ太平洋地域研究センターは、1967年に設置されましたアメリカ研究資料センターを改組拡充して、2000年に発足したセンターでございますが、日本におけるアメリカ研究の牽引車として重要な役割を果たしております。日米和親条約150周年にあたり、このセンターの存在が今回のまことに時機を得た展示会を可能としたことを、東京大学といたしましても非常に誇りにしているところでございます。

また今回の展示会には東京大学の史料編纂所が所蔵する貴重な図像史料も展示をされております。これも私どもの大学が世界に誇る財産でございます。

展示会の関係者の方々のご努力に敬意を表すると共に、本日のレセプションに学外からわざわざご参集をいただきました来賓の皆さまに御礼を申し上げます。簡単ではございますが、東京大学を代表してのご挨拶とさせていただきます。

乾杯の辞

東京大学名誉教授
嘉治 元郎

嘉治元郎でございます。いま能登路先生がおっしゃったように、今回のシンポジウムは13のインスティテューションのご協力によるということ、そのご関係の方々が全部お見えになっているというそういう席で乾杯の音頭をとらせていただくのはたいへん僣越なことですが、時間の長さという点では、私はいま立っているこの場所に皆様方の中で一番長い因縁を持っている人間なので、敢えて乾杯の音頭をとらせていただきます。それと言いますのは、今からおよそ60年前に、当時ここにございました第一高等学校という学校に私は入学いたしました。この建物の場所、ここには一高の同窓会が第一高等学校に寄付した同窓会館がございました。それが紆余曲折があったのですが、一昨年から本学部のご努力によりまして、こういう立派なファカルティ・ハウスに生き返ったといひましようか、面目一新したそういう建物がこれであります。



嘉治元郎 東京大学名誉教授

ついで今からおおよそ50年くらい前に、私は東大教養学部の助手になりました。教養学科のアメリカ科の仕事を主にやるようになりました。先ほど、古田先生はアメリカ研究資料センターの歴史のことをおっしゃいましたけれど、それにはさらに前史がございまして、1950年にスタンフォード大学と東京大学の共催でアメリカ研究サマーセミナーというのが出発いたしました。その事務局の手伝いをしたという経験もございまして、言い換えますと、東京大学教養学部におき

ますアメリカ研究50年の歴史の3分の2ぐらいをお手伝いした、そういう身でございますので、今日のこのお集まりは本当に嬉しいお集まりでございます。それでは皆様方が、私がこれまで送りました日にちをはるかに超える長期にわたって今後、東京大学のアメリカ研究のためにご協力いただくことを祈念いたしまして、杯をあげたいと思います。ご唱和ください。乾杯。どうもありがとうございます。



シンポジウムパネリスト
左から遠藤泰生教授、三谷博教授、加藤祐三 横浜市立大学元学長、
富澤達三 神奈川大学COEプログラムポストドクター

祝 辞

外務省広報文化交流部長
近藤 誠一



近藤誠一 外務省広報文化交流部長

ただいまご紹介いただきました外務省広報文化交流部長の近藤でございます。本日は「彼理とPerry——交錯する黒船像」展のスタートに当たりまして、お招きをいただきましてたいへんありがとうございます。外務省が後援させていただいているのもその意義が非常に深いからでございます。外務省はお金はありませんが、後援ぐらいはできますので。

いまご紹介いただきましたように私はここ駒場に4年おりましたが、私は実はアメリカ科ではなくて、イギリス科におりました。アメリカとの関係では、能登路先生とほぼ同じ頃でございまして、嘉治先生もまだ教えていらっしゃいました。外務省で3年ほどワシントンに勤務したことがございます。たまたまこの5月にちょっと出張でボストンにまいりまして、ジョン・ダワー先生と夕食を一緒にしました。非常に自慢げにこのMITの展示のことを言っていました。今日またここで東大とMITの共同作業と言いましょか、そのような場に出席をさせていただいて、たいへん光栄にかつ嬉しく思っております。

1人が1分喋っても13分になってしまいますので、なるべく短くしますが、一言、私の今の仕事の関係で申し上げます、文化交流というのは中長期的に非常に大事であるということ、これはもう申すまでもございませんが、強調したいと思っております。特にこの150年の間の日米

の交流の歴史というのは、すなわちこれだけ違うルーツを持った民族が互いに交渉し、戦い、そして今や非常に緊密な同盟関係にあるということ、ぜひ全人類にもっと共有してもらっていいのではないかと思います。特に中東、アフリカ等、これから発展をしていこうという国はアメリカとどうつき合うかという点に非常に悩んでおります。彼らに言わせると、彼らはmodernization without Americanizationといった形で、近代化はしたいけれどもアメリカと同じにはなりたくない、というような言い方をよくします。まあアメリカを非常に単純に捉えているのかもしれませんが、そういう意味では日本の経験というのは、そういう心の葛藤も乗り越えて今日まで来たわけで、その歴史こそ全人類が学ぶべきもので、これからアメリカを中心に世界の秩序と安定を作っていく上で、みんながそこから何かヒントを得られるのではないかと思います。そういうような観点からこの150年の経験というのを日米間だけではなくて、第3のそれ以外の地域とも積極的に共有をしていくということをぜひ私の仕事の一部としてもやっていきたいと思っております。

それからもう1つは、日米間には共通点とともに当然違う点もございますが、これからグローバル化が進む中で、文化の多様性というものこそ発展のエネルギーであると思っております。従って共通の普遍的な価値観に立ちつつ、それぞれの多様で独特な文化、考え方というもの理解し合いながらお互いに高めあっていくということがこれからの人類にとって必要なことだと考え、そのための官民挙げての動きへの一種の幹事役を外務省の立場で微力ながらやっていくというそんなつもりで仕事をしております。

いずれにしても函館と下田と横須賀と長崎ですか、これらの地で巡回展があるということは素晴らしいことだと思います。こういったいろいろな絵などを見て、日本国民の1人1人がさっきも申し上げたような問題意識を少しでも持ていただければ、そして誇りをもってこの日本を今後ひっぱっていく、そういうエネルギーの源泉になればと思っております。長くなりましたが、本当に本日はおめでとうでございます。

アメリカ大使館文化担当官
Mark Davidson



マーク・ディヴィッドソン
アメリカ大使館文化担当官

どうも皆さん、おばんでございます。アメリカ大使館文化担当官のMark Davidsonと申します。どうぞよろしくお祈りいたします。今日こちらにいらっしゃる方々は、みな非常に英語がお上手な方ばかりではないかと思いますが、残念ながら、私は挨拶を英語ではしません。私の下手な日本語でご挨拶をさせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお祈りいたします。(拍手をうけて) まだです。終わってないです。

この重要な機会にそうそうたるメンバーの中でお話しさせていただけることを本当に光栄に思っております。しかし、若輩者である私は、なんだか松井とイチローと一緒に並べられたマイナーリーグの選手のような心地です。しかしながら、アメリカ大使館、そしてまさにアメリカ国民を代表して、この注目すべき展覧会を日本で開くために力を尽くされた皆さまに心から御礼を申し上げます。

実は私は恥ずかしいのですけれども、東大出身ではございません。しかしペリー提督と同じロードアイランド州の出身です。だから個人的にもこの展覧会に特別な興味を持っております。ここに展示されている、日本人から見たアメリカ人の面白いイメージを見ていると、私自身が日本の友人たち、あるいは日本人である私の妻からどのように見られているのか、想像できます。実は少々複雑な気持ちなんです。それに残念ながら私の日々の仕事服は、提督や彼の部下が着ていたものほどファッショナブルでもありません。

ん。

最後に、私たちの子供たちが今、当然のこととして受けとっている日米の政治や文化のパートナーシップは、150年前には想像もできなかったことです。アメリカ人と日本人はこれまで長い間、共に歩んできました。共に歩んできた素晴らしい歴史は、私たちがこれからさらに明るい未来を望めることを教えてくれます。この展覧会の成功を心よりお祈りし、私の非常に長くてつまらない挨拶を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

アメリカ研究振興会理事長
中原 伸之



中原伸之 アメリカ研究振興会理事長

こんばんは。ただいまご紹介いただきましたアメリカ研究振興会の中原でございます。この度はたいへんに有意義な展示とそれからシンポジウムを開催されまして、東京大学の教養学部にございますアメリカ太平洋地域研究センターはたいへんにいい仕事をされたということで心から敬意を表する次第でございます。

私、東大教養学部におりましたときに、実は中屋先生を顧問をお願いして、アメリカ研究会というのを昭和28年に作った覚えがございます。それからずっとアメリカに興味を持ちまして、東大を出て、昭和32年でございますが、すぐにハーバード大学の大学院にまいりまして、2年間経済学を勉強しまして、マスターをとって帰ってまいりました。

考えてみると150年前にアメリカという国が日本のドアを開けたということ



展示を見る瀧田佳子教授と
マーク・ディヴィッドソン アメリカ大使館文化担当官

本のドアを開けたのがヨーロッパの列強であったら、日本の歴史はどういうふうに変っていたかということをお私よく想像するわけでございます。太平洋をはさんで非常にプラグマティックな国が、先ほどちょっとシンポジウムでお話ございましたように、これは歴史の教科書には出ておりませんが、まったくびっくりいたしましたけれど、難破船・難民の救済といった、そう

は、日本にとってはたいへんに幸せであったのかなというふうに思うわけでございます。中国が阿片戦争で列強に蹂躪された。それを日本の幕末・明治維新の志士、例えば高杉晋作などが見に行きまして、こういうことでは日本は列強の植民地になってしまう。今日のシンポジウムにもございましたけれども、幕藩体制がアメリカと和親条約を結んだ中で、まず体制を倒さなきゃいかん。そのためには尊皇攘夷か開国か、どちらでもいいというお話が今日はございました。日本人というのは私に言わせるとたいへんに経験主義的で、しかもプラグマティックな国民でございます。そういう意味でアメリカと非常に共通する点があると。もし日

いうものを中心にして、その他、通商、そして太平洋航路と、こういうことで2つの国のつきあいが始まったという加藤先生のお話がありました。そういうことで、日本にとってはまあ平和的で有意義な開国であったと思います。その後、両国関係というのはうまくいっていましたが、どういわけか日露戦争が終わりまして、日本の移民の排斥というのが起こる、そして2つの国のコースがずっと変わってまいりまして、日本が支那事変で中国本土に出ていく、アメリカはその時からイギリスと手を組みまして、上海の空港にたくさん軍事物資を送るといいうことで、あからさまに中国サイドについてしまう。そこで非常に運命的な太平



歓談する中原伸之、アメリカ研究振興会理事長、油井大三郎 CPASセンター長、
浅島誠 東京大学大学院総合文化研究科長

洋戦争、まあ私どもの世代は「大東亜戦争」と言っておりますけれども、それに突入してしまいました。それが終わったらば、また元に戻りまして、やっぱりアメリカって国はたいへんな国だと。大きいですし、それからいろいろな可能性を秘めているし、何て言っても若い国だ。そこで日本が平和条約を結び、日米安保条約を結びまして、今日になるわけでございます。

どうもアメリカという国は時々無茶をやりまして、現在はどちらかというとクリスチャン・ファンダメンタリズムに近いのかどうか分かりませんが、ブッシュという人が出てきて、9.11の後に、私の任務はこれだといって、アンチ・テロリズムの戦争をやり始める。日本にはたまたま小泉さんという人が出てまいりまして、私の友人でございますが、ブッシュが好きになっちゃって、ブッシュを助けるという。これまではSo far, so good.でございますけれども。

日本でも大正デモクラシーの後でどうして軍閥が出てきたのか。これは歴史家の方にぜひ解明していただきたい大問題でございますけれど、そこにはやはりアメリカの30年代のGreat Depressionというのが非常に深く関わっているというふうに思うわけでございます。日本が、ダワーさんの本にはあまり触れてございませぬけれども、あの大正デモクラシーの素晴らしい時代を経て、軍閥政治に突入してしまいました。私は子供の頃、経験がございまして、誠に遺憾なことなわけございましたが。なぜ日本がアメリカと、日露戦争の後で決定的な対立のコースに至ったのかということ、ここにいらっしゃる学者の先生方にぜひ十分に解明していただきまして、将来の教訓にしていきたいと、こういうふうに思うわけでございます。

私どものアメリカ研究振興会は、できた時から東京大学のアメリカ研究をサポートするというをなにか運命づけられているわけございまして、私が理事長になりましたから、そういう甘えはいかんと、もうちょっと何に補助金を使ったか透明にしろ、なんていうことを言っておりますけれども、今日のお話をうかがい、それから今日のシンポジウム、展示会をうかがいまして、やや態度が軟化したしまして、センターの方も一生懸命やっただけということを期待いたしておるわけでございます。

本当に今日のセミナーそれから展示会は、ある意味では画期的なものでございまして、ぜひこの展示会それからセミナーの成果というものをセンターの方を通じまして、日本全体、それからアメリカにもぜひ知らせていただきたいということをお願いいたしまして、祝辞といたします。本当に今日はおめでとうございました。

文部科学省国際統括官 井上 正幸

この度は貴センターが企画された日米和親条約締結150周年記念の「彼理とPerry——交錯する黒船像」展の開催を祝うレセプションにお招きいただきましたが、急に他の公務が入ってしまった関係で欠席せざるを得なくなり、たいへん残念に思っております。今回の展示は、日本が開国した折りに、日米の双方が描いた相手の画像を対比する形で展示されているとうかがい、拝見するのを楽しみにしておりました。幕末の開国以来、日米両国間ではさまざまな出来事がありま



井上正幸 文部科学省国際統括官のメッセージを代読する司会の能登路雅子教授

したが、多くの面で相互に交流し学びあってきたこの150年の歩みを振り返ることは大切なことと思います。近年の日米関係はきわめて緊密になっておりますが、それでも、文化を異にする国同士の交流には、しばしばコミュニケーションのギャップが発生します。このようなギャップを埋めていくためには、相互の文化交流をますます活発にする必要がある

と思います。そのような観点からも、今回の展示が成功をおさめ、日米間の文化交流の促進に役立つことを願っております。

平成16年10月2日

「黒船とサムライ」巡回展示日本実行委員会
了仙寺住職

松井 大英



松井大英「黒船とサムライ」巡回展示日本実行委員会 了仙寺住職

皆さん、こんばんは。松井でございます。いま何か運営委員長と言われてまして、あれ?と思ひまして、今日初めてその名前をお聞きしたんですけれど……。この展示、実は昨年7月に第1回が行われました。場所はアメリカのロードアイランド州のニューポートです。昨年7月に、ニューポートで第20回の「Black Ship Festival」、いわゆる「黒船祭」が行われました。ニューポートはペリーの出身地ですので、下田と姉妹関係を結んでおります。下田が今年第65回の黒船祭、そしてニューポートが昨年第20回の記念大会ということで、その折りに、ボストンの日本領事館の主催で、このダワー先生のペリー展を行っていただきました。で、それを見まして、ぜひこれを日本でやりたいと。しかしお金がない。下田は非常に小さい町で、今回、日本開国150年ということで、各自自治体が名乗りをあげました。下田の他には長崎、横須賀、函館。一応この4市で行う形になりましたが、他の町が、数十万の都市ばかりの中で2万7000の下田が入りこむわけですから、非常に苦しいと。ただ非常に身軽で何でも動けるといって、まあお金がないか



左から末延由美子 国際交流基金日米センター、
和久本芳彦 国際文化交流推進協会理事長、
久野明子 日米協会専務理事、遠藤泰生教授、松井大英 了仙寺住職

ら何でも動けるのですが、それで今回のこのことを何とかできないだろうかということで、日米協会の方にずっとお話ししていたところ、実は東京大学さんでも同じ事を考えていらっしゃるということで、「あ、これは渡りに船」と思いました。うちの方はちっちゃいですから、東京大学さんのほうでやる気になっていただければ、これはすぐに実現すると思ひまして、渡りに船と言うことで乗ったわけでございます。それもあまして、今回この素晴らしい展示をまず見せていただき、これを参考に私の方でもやらせていただければと思っております。11月の、こちらの方は中旬にさせていただく予定でございます。同じようにシンポジウムを下田でも行います。シンポジウムの名前は「下田の異文化交流」と。実は下田はこの条約の中で「遊歩権」、遊んで歩く権利と申しますが、アメリカ人に町の中を自由に歩く権利を与えた初めての町になります。それもあまして、今回下田が開港されて150年という記念事業を昨年から今年にかけて17事業をいまも行ってありますが、その中の1つとしてこのシンポジウムを行います。そのテーマを交流と選びました。そしてメインテーマの中で、今までの異文化交流ですと、だいたい相手を理解するというのが中心でしたが、今回、下田は自分をどう相手に理解させるかというのをメインテーマに挙げまして、やっていく予定でございます。そして民間があくまで中心になります。今回の事業は企画からすべての運営

まで全部、下田は民間で行っております。行政はお金を出すだけでいいよ、というような形にしてあります。そして下田が大切にしたいものが1つあります。14事業の1つに、ハリスが下田に来て領事館を構えます。その時に、旗がありません。星条旗がなかったんですね。持ってこなかった。まあ、あるにはありましたが、ちっちゃくて、とても掲揚できない。で、そこでどうしようと下田の人に相談したところが、下田の人が作りました。下田のお針子さんが数人で、いわゆる名もないお針子さん達はその星条旗を作りました。で、それが現在、ニューヨーク市立大学に保管されております。その旗は例の大戦の時のミズーリ号の艦上に翻っていた旗でもございます。そしてその旗を今回下田は復元をいたしました。2つ作りまして、1つを下田へ、そして1つをアメリカへ。これは何を意味しているかと言いますと、国旗は国家の象徴で、国際関係、国と国同士を結ぶものですが、しかし、それを縫ったのが、民間の名もない人間である。それを両国の人に忘れてほしくない。そして、それをですね、もうかなりしつこく私言っているんですけど、大使館の職員の方が見ることができるところにぜひ飾っていただきたい。必ず国際関係を支えているのは民間の名もない人たちですよ、ということ。これを忘れてほしくないということで作らせていただきました。

今回、下田が本当にちっちゃいながら、できる限りのことはやろうと思ひます

が、その中で東京大学さんがこういう形でやっていただきまして、うちとしては本当に助かったという、泥船に乗っているところをすくい上げていただいたような気持ちでございますので、今後ともよろしくお願ひいたしたいと思ひます。

そして最後にお願ひです。11月の20日、21日のシンポジウムでは、留学生の子たちを集めています。留学生の子たちと日本の子供たちに体験をさせて、その中でコミュニケーションを図っていこうと思ひます。実は東京大学の留学生センターにもいまお願ひして、留学生の派遣をお願ひしているところです。ぜひ先生がたもお知り合いの留学生の方に、ぜひ11月20日、21日は下田に行けということ、行けば単位をあげるというくらいまで言っていただければ行くと思ひますので、ぜひその辺のご協力をよろしくお願ひいたしたいと思ひます。

ではご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

日米協会専務理事
久野 明子



久野明子 日米協会専務理事

ご専門の先生方を前にしてアカデミックな話はとてもできませんので、今年の4月3日に日米交流150周年記念式典を横浜で開催したときのことを少し話させていただきます。

今から2年前でしたが、私ども日米協会の管轄省庁である外務省北米一課から会いたいというお電話がありました。2004年は日米和親条約が締結されて150周年にあたるので、日米協会として何か記念

行事を企画しなければと考えていた矢先でした。担当者とお目にかかる、先方も150周年にあたって記念事業のようなことをやりたい。ついては、民間の日米協会が音頭をとって運営委員会を立ち上げてくれないかというお話でした。

翌年の2003年の1月に、日米関係に関わりの深い知識人の方たちから成る「日米交流150年委員会」を発足させ、事務局は日米協会の中に作られました。毎月1回開催された運営委員会では、どのような記念事業をすべきかが議論され、結局、記念式典、記念シンポジウムおよびレセプションを行うことに決定しました。

記念式典をするに当たって、場所をどこにするかが問題になりました。1854年の3月、ペリー提督が当時の神奈川村に上陸して「日米和親条約」を徳川幕府との間で締結したので、私どもはぜひとも歴史的にもゆかりのある横浜でと主張しました。外務省側は、政府要人が来られる場合、時間的にも警備の面でも問題があると難色を示しましたが、結局、横浜市の強い要望もあって、横浜開港広場の公園で行うことになりました。

次に式典のプログラムですが、日米両国の政府代表として小泉総理のご出席と、ブッシュ大統領にはビデオメッセージをいただくように外務省にお願いしましたが、その通りに実現できました。また、これからの日米関係を担っていく日

米両国の若者たちに大勢参加してもらいたいので、若者の好きな音楽演奏と日米の大学生による未来へ向けてのメッセージを述べてもらうことにしました。音楽演奏にあたっては、日米両国が音楽を通してどれだけ密度の濃い交流を長い年月にわたって行ってきたかを参加者に知ってほしかったので、アメリカ人の尺八奏者に日本の曲を、そして日本人のバンジョー奏者にアメリカの曲を演奏してもらい、二人のコラボレーションは大変好評を得ました。

式典を横浜開港広場という外で行うという当方の希望を通したため、セキュリティの点で色々と難しい問題に直面しなければなりません。総理のご出席が本格化した時点から、外務省と神奈川県警の顔色が変わってきました。運悪く3月にはブッシュ大統領がイラク攻撃を開始したので、みなさん神経を尖らせていました。外で開催するという事は、雨天の場合の準備も必要ということで、その準備も大変でした。多分、この式典は県警と外務省の見事な連携プレーがなかったら、警備の面について私たち素人の運営委員だけではとても出来なかったと思います。

当日は、前日まで降った雨がすっかり上がり、見事な青空が広がる晴天となりました。私たちの願いが天に通じたのだと思いました。小泉総理は、開口一番「春

うらら」の晴天の下に……とおっしゃったので会場は爆笑。あの一度も勝てない馬「ハルウララ」を連想したのでしょうか。式典は始めから終わりまで終始和気藹々の雰囲気の中で執り行われました。参加者の数は、私たちが当初予想していたよりはるかに多く1,000名近くになり、800席準備した椅子も足りなくて、立ち見をお願いしなければならないほどでした。

午後から横浜開港記念会館でひらかれました日米交流150周年記念シンポジウムも大好評でした。テーマは「日米関係の軌跡と展望」で、本日ご出席された遠藤先生もパネリストのお一人として参加してくださいました。

色々大変な問題もありましたが、日米交流150周年記念事業に携わることができて、本当に良かったとつくづく思います。式典開催のちょうど1週間後にイラクで日本人3人が人質として囚われたというニュースが飛び込んできました。もし、この事件が1週間前に起きていたら、小泉総理と逢沢外務副大臣、そして多分ベーカー駐日大使もご出席いただかず、式典開催も流れたのではないかと思います。記念式典がとどこおりなく終わって、150年前に横浜の地を踏んだペリー提督も喜んでくれたのではないのでしょうか。

大変、とりとめのない話になりまして失礼いたしました。本日はお招きありがとうございました。



左から加藤祐三 横浜市立大学元学長、
義江彰夫教授、石井明教授

挨拶

東京大学史料編纂所副所長
加藤 友康



加藤友康 東京大学史料編纂所副所長

ただいまご紹介いただきました史料編纂所の加藤でございます。今回、アメリカ太平洋地域研究センターが主催され、MITと美術博物館の共同の企画展示ということで、「彼理とPerry」展が開催されましたことをお祝い申し上げます。この企画展示に私どもの史料編纂所でもなにがしかの協力ができたということで、たいへん喜んでおります。

史料編纂所は、皆さんあまりご承知ないというか、11ある東京大学の附置研究所の中で非常に地味な研究所でございます。歴史としては、1869年（明治2年）に、明治政府の下で史料編輯の国史校正局という組織から出発いたしまして、当時の帝国大学に国史科ができる時、1888年（明治21年）の時に、大学の1つの組織として移管されまして、その後、1950年に東京大学の附置研の1つとなって今日に至っているわけです。史料編纂所は全国各地から、古代から明治維新までのいろいろな史料を調査して集めて、それを史料集として刊行しまして、日本史の学界や日本史の研究者の方に提供しているのですが、今回の展示に関わるということで申し上げますと、1906年に当時の外務省から外国関係の史料を移管されまして、そこで幕末外交関係文書を編纂することが始まりました。1910年に第1冊目が刊行されたのですが、その第1号文書が嘉永6年6月3日付の浦賀の方から異国船通過を報告する書状ということで、今回のペリーの来航というテーマと密接に関わる

仕事を担当の研究部門で行っております。現在、第1冊目が刊行されてから95年たつて、まだ49冊しか出してなくて、1860年の所にやっと至ったということで、一応、明治維新までやるという息の長い仕事をしておりますので、また今後ともよろしくお話ししたいと思います。

なお先ほどセンター長の油井先生の方からペリー渡来絵図貼交屏風のお話がありました。ここで皆さんの誤解を解いておきたいと思うのですが、史料編纂所はそういう長いスパンで仕事をしているのですが、決して敷居は高くございません。例えば国宝、島津家文書は一昨年国宝に指定されたのですが、そういうものでも研究上の必要があればどなたでも、1週間前に申請をいただければご覧いただけるような、非常にオープンな研究所であるということをこの際ここで強調しておきたいと思っております。

史料編纂所は今、今回の総合文化研究科なども含めて、学内で法人化の後いろいろ連携をしていこうということで、進めておまして、実は今日は所長がこちらの方にご挨拶をと思ったのですが、今同じ時間帯に東京大学とフランスの高等研究院で日仏のコロク、ユーラシアをテーマにしたシンポジウムをやっております。そちらの方に出ているので失礼をしております。それも人文社会系研究科と東洋文化研究所と私どもの史料編纂所でいろいろ連携をとりながら、やっております。このように史料編纂所は決してカビの生えた敷居の高い研究所ではなくて、外に開かれている研究所に脱皮していくという、実際もうそういうふうになっておりますので、この場においての方で日本史の関係でいろいろご関心があれば、ぜひご相談いただければ、私ども喜んでお手伝いをいろいろなところでさせていただきますと思っております。ということで、今回の合同の展示と申しますか、それが始まりましたことをお祝いを申し上げます。

なお一言、2年前に私どもの所で東京の国立博物館で特別展を、史料集を出してちょうど100年になるのでやったのですが、一般的に展覧会というのは限られた期間に多くの方においでいただくということが非常に大事です。そのためには宣伝ということも大事になってきます。明日から一般公開され、14日までどうか

がっておりますので、明日からの開催期間中、そのことをぜひ念頭において、いろいろご努力いただければと存じます。本日はどうもおめでとうございます。どうも失礼いたします。

東京大学大学院総合文化研究科
美術博物館委員会委員長

義江 彰夫



義江彰夫 東京大学美術博物館委員会委員長

ただいまご紹介いただきました美術博物館の委員長を務めております義江でございます。今回は美術博物館にとってもたいへん記念すべき展示会をさせていただくことになりまして、そのことをまず厚く御礼申し上げます。私どもは昨年、美術博物館をリニューアルいたしまして、1回目は「ロラン・バルト」展をいたしました。これはたいへん大成功のうちに終わったのですが、その第2回目として「彼理とPerry」展を開いてくださったということで、弾みがついております。私どもは決して美術品だけを展示する博物館ではございません。今回のような企画も積極的に受け止めて、学内はもちろんのこと、国の内外にアピールをして展示を充実させていきたいと思っております。これからは既に、今年はこの秋に「第一高等学校」展がありまして、来年は「王朝貴族の装束」展、ドイツの「バウハウス」展というのを企画いたしております。いろいろそういう企画が目白押しなんです。それらを準備する上でも、私どもは今回の展示に協力させていただいたということをたいへん感謝しております。ありがとうございます。

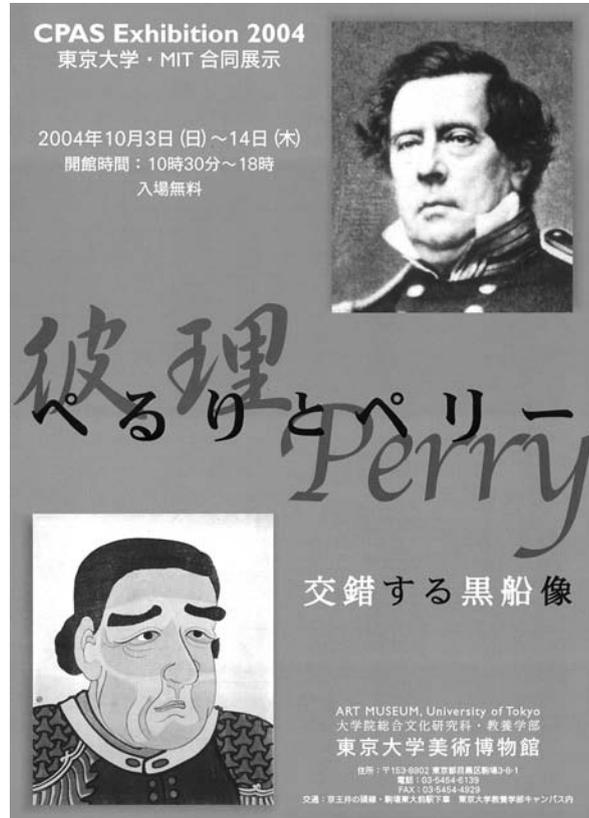
閉会の辞

駒場図書館長
木畑 洋一



木畑洋一 駒場図書館長

図書館長というよりは、アメリカ太平洋地域研究センターの一員として、閉会のご挨拶をさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。サポートをしていただいた方々、シンポジウムでお話をいただいた方々、それから実際に展示会とシンポジウムを実現するに際してたいへんご尽力をいただいたCPASに関係するさまざまな方々に感謝したいと思います。それから美術博物館の関係の方、また博物館の方に行くんだと言ってさっき出て行かれた義江委員長など、本当にいろいろな方々のご努力・ご尽力で明日からの展示、それから今日のシンポジウムが非常にうまく滑り出したというふうに思っています。コインシデンスという言葉がありますが、ハッピー・コインシデンスで、今日は、三谷さんも言っておられましたけれど、イチローの記録が達成された日です。今日のこのシンポジウムの日というのは、恐らく年表があっても残らないと思うのですが、イチローの記録達成の日は残るでしょう。私は世界史年表の編集をやってのですが、今度改訂するときは、イチローのこれはおそらく載せるでしょう。そうするとその日にシンポジウムがあったということを今日いらっしゃった人は思い出すという、そういう仕組みになっておりますので、本当におめでとうございます。皆さまに感謝しながら閉会の挨拶に代えたいと思います。どうもありがとうございました。



ポスター「彼理とPerry」展



展示会場にて
左が東京大学史料編纂所蔵
「ペリー渡来絵図貼交屏風」のレプリカ

特別寄稿

「日米関係書」
蒐集の思い出東京大学名誉教授
佐伯 彰一

この度「日米関係文庫」ともいうべきわが蔵書群を駒場に引き取ってもらうこととなって、ホッとする思いと同時に一抹の侘びしさも抑え難い。というのも、このテーマを思いついて、古書展などに足しげく通いだしたのが、たしか60年代の半ば、丸2年間のミシガン大学滞在から間もなくのことに違いない。そうしたいきさつは、その頃初めて書き上げた長編評論『日本を考える』（1966）で扱った覚えもあるが、この本を恐る恐る贈呈した川端康成さんから思いがけずの墨書の長いお手紙を頂いて、うれしさの余り三島由紀夫に「吹聴」したら、さすがに

「敵もさるもの」、「川端さんは、夜眠れないとやたらに長い手紙を書く癖があるんだよ」と、何だか口惜しさを底に隠した強い語調で答えられたことは今も忘れない。

いや、これは「文献収集」とは直接かわりのうすい挿話だが、もっと直接のきっかけ、いやほとんど呼び水の役を果してくれたのは、今は故人の批評家瀬沼茂樹さんの『日本文学世界周遊紀行Ⅰアメリカ篇』で、このユニークかつ壮大な企画は、残念ながら第18巻きりで中絶した模様だが、足しげく古書展などに通われて、自身収集された貴重なコレクション、今はどうやら「近代文学館」に寄贈されたまま、ほとんど忘れ去られているのでは？

「日米関係」にかかわるわが多年の収集本の将来もあるいは？という気がしないでもないけれど、遠藤泰生君という頼もしい管理者、後継者(?)もおられるこ

とだし、比較文学者もその数少なからぬ「駒場」のことだから、必ずや見事に活用して頂けるのではないかと念ずるのみ。

「未来論」は別として、わが蒐集歴をふり返れば、『日米未来戦』、『われ等もし戦はば』といったかなり物騒なタイトル、また内容のいわば通俗読物が、この蒐集の発端であったことを打明けずにはられない。大正11年生れ、昭和初年のわが国の急激な「軍国主義化」に少年期を過ぎた人間の、今は遙けき昔の思い出であるが、自称「將軍」のホーマー・リーというかなり奇矯なアメリカ人の手になる『日米未来戦』の元版をふと入手した折の驚きと嬉しさは、今でも鮮かに思い出すことができる。

いや老人の「昔話」はともかく、この「日米関係文庫」、空しく片隅に眠り続けるのではなく、若き新進学徒たちに活用して頂けると嬉しいのだが。

佐伯彰一文庫の
創設について

佐伯彰一先生は、東京大学大学院比較文学比較文化専門課程の主任教授を1974年から1983年まで務められ、アメリカ文学研究、日米比較文化研究などの分野に数多くの著作をお持ちです。その先生の蔵書中、900冊ほど

がこのたびアメリカ太平洋地域研究センターに寄贈されました。明治・大正・昭和にわたる日本人の対米認識を映し出す貴重な図書がこのコレクションには含まれます。センターではこれを佐伯彰一文庫という形で受け入れ、学内外の方々に公開することにいたしました。他のセンター蔵書との混配という形でしか公開できませんが、大正・昭和初期の日米未来戦記ものや第二次大戦直後のアメリカブームを偲ばせる図書など、日米比較文学比

較文化研究を志す者にはまたとないコレクションと思われま。研究者、学生の積極的な利用をお待ちします。なお、今回の蔵書の寄贈に関し、佐伯泰樹先生のお手を何回も煩わせました。記して謝意を表します。

(東京大学アメリカ太平洋地域研究センター
遠藤 泰生)

Dying In Japan

La Trobe University /
2003-04 CPAS Professor

Allan Kellehear

There is a certain 'sameness' about the modern experience of dying. Even when you look at the different national attitudes toward death all roads often seem to lead to the same place – the hospital. A recent Japanese health ministry survey found that 38% of the general public want to die in a hospital because they don't want to burden their families. In the West, most people want to die at home because they want the company of family at the end of their lives. It doesn't really matter either way because most of them will die in a hospital or a place like it.

Before the 20th century most of us in Japan, Australia, Europe or the USA died in the company of friends and family and usually that happened at home. That's also where you found the doctor and the priest – they came to us. But now death and dying has slipped into 'institutional health care' and become something that many people think should be medically supervised. Even the recent developments of hospice and palliative care – a health care approach designed to assist people to 'die as they have lived' – increasingly views itself as a medical speciality and not a community health offering supporting people to maintain their activities and locations important to them till the end. I recently met with a senior official of one of Japan's largest philanthropic association and all he could ask during our meeting was 'how can we attract more doctors to palliative care in Japan?' He seemed to think dying was a medical problem. But even the most conservative understanding of hospice accepts that dying is a psychological, social and spiritual journey. The physical comfort issues support and facilitate those 'thinking,' 'remembering' and 'social' experiences in the final weeks and days of life. An obsession with medicine in the context of dying is an

obsession with the body – a narrow and narrow-minded view of the meaning of one's life just at a time when your personal life meanings – and not the body – are the principle tasks laid before you.

In countries such as the USA and Australia, every time one listens to a news report about a killing at a school or workplace the newscasters are always keen to report that the witnesses or bystanders are seeing counsellors. Where are the friends, the work colleagues, the parents, or other family in all this? Are our friends and family not enough to support us in our troubles anymore? Maybe in places such as Australia or the USA this is true. But it wasn't always this way. Communities have always had ways of closing around those in need, supporting and succouring those who have experienced great loss by offering visitation, ritual, commemoration, communication, supports, and other opportunities for social sharing. As time passes, workplace and family migration increases, or loss of memory of the 'old ways' occurs, a cultural amnesia can set in and we can be suddenly without support in times of crisis. This is the growing situation of death and dying in the modern world. Do we want to fill our lives then with counsellors and medical services?

Palliative care everywhere now faces these kinds of questions and challenges. Home hospice care in Japan – the service that encourages and supports people to die at home with their professional support – not domination – bravely struggles for greater public and government recognition of its work. Other more institutionalised palliative care services – such as hospice – are becoming increasingly aware of the need to create partnerships with the communities that they serve and to enlist their support for care of the dying as a shared responsibility. Dying is not merely a medical matter. More importantly, it is a community affair.

In Australia, the federal government is injecting special funding into experiments for community partnerships, public education, and social support

programs that will assist people who are dying and their carers at home. State governments are funding information leaflets in several community languages, and hospices are being encouraged to provide facilities for diverse religious and ethnic beliefs.

In Japan, 119 out of 120 hospice services are Christian, and this situation in a country whose culture is largely an amalgam of Buddhist and Shinto beliefs. An important philanthropic foundation in Japan is prioritising the attraction of more medical staff when the hospice movement in other parts of the world is attempting to respond to the growing demand of patients for greater attention to their social, emotional and spiritual needs. Japanese home care struggles for equal recognition alongside hospice – its much larger institutional brother. Great challenges face the local palliative care scene, even more so if those challenges are not recognised by the general public here.

After all, in the end, it will become their problem.

ケリヒア氏寄稿文 一抄訳一

日本のみならず他の国々でも、自宅で死にたいという本音はともかく、現代人は一様に病院で最期を迎える傾向にある。20世紀以前にはコミュニティの行事であった死は今や医療制度の中で理解されている。人が生きてきたように死を迎えられるよう支援するホスピスや緩和ケアでさえも医療の専門性を重視する。カウンセラーや医療サービスが、かつては訪問や会話、儀式などを通して人々のさまざまな痛みを緩和したコミュニティの役割を担う。しかし、私たちは医療の専門家に人生を任せたいと思っているのだろうか。

人が死ぬということは心理的で、社会的でスピリチュアルな行程であって、必ずしも医学的な身体の死を意味するものではない。オーストラリアをはじめ、他の国々のホスピスは患者の社会的、感情的、精神的な要求に応える試みを始めている。日本でも専門家の（支配ではなく）協力による在宅ケアへの理解が求められ、緩和ケアを提供するホスピスはコミュニティとの連携の必要性を自覚しはじめています。

仏教と神道が混じり合う文化を持つ日本のホスピスのほとんどがキリスト教の施設である。しかし、著名な機関でさえも、患者の社会的・精神的なニーズを満たすより、医療従事者の数を増加させることを優先している。そのホスピスの現状が在宅ケアにも反映している。そこに問題があることを日本人が認識しなければ、いずれ、より大きな難題となって彼ら自身に戻ってくるだろう。

(安田 こずえ)

歓迎ークリスティン・ニコルズ客員教授

◆2004年10月1日に、オーストラリア・アデレード大学教授クリスティン・ニコルズ博士が当センター客員教授として着任した。滞在予定は2005年9月までで、教養学部と大学院総合文化研究科でオーストラリア研究を教える。専門はオーストラリア・アボリジニの美術。著書Christine Nicholls and Ian North, *Kathleen Petyarre: Genius of Place* (Kent Town, SA: Wakefield Press, 2001)はArt Association of Australia and New Zealandにより、2001年度のBest Art Bookとして表彰された。

◆2004年10月26日、駒場ファカルティハウスにおいて、クリスティン・ニコルズ教授の歓迎会が開かれた。



クリスティン・ニコルズ CPAS客員教授



左から岡山裕助教授、木畑洋一教授、油井大三郎教授、クリスティン・ニコルズ客員教授、サンドラ・ルコア助教授、マリー・ソーステン外国人教師



左から能登路雅子教授、トーマス・ザイラー フルブライト招聘講師、中尾まさみ助教授

スタッフ・エッセイ

バークレー
2001年10月

木畑 洋一

2001年10月1日、私は半年間の在外研究のために、カリフォルニア大学バークレー校に到着した。9月11日のいわゆる「同時多発テロ事件」から20日後のことである。その1週間後には、アメリカなどによるアフガニスタン攻撃が始まった。アメリカ研究者ではなくアメリカに長期滞在するのとはじめてだった私の眼に映ったバークレーとその周辺の様子のなかで印象深かった点のいくつかは、次のようなものだった。簡単につけていた日記（かぎカッコの部分）を引きながら、当時の思い出を記してみよう。

私が在外研究の場所としてバークレーを選んだのは、友人であるイギリス人の歴史家がいるためだったが、1960年代のラディカルな学生運動・民衆運動の中心地としてのバークレーに何となく思い入れがあったためでもあった。従って、9.11後の愛国心の高揚に対してバークレーの人々の多くがある程度距離を置いている

だろうとは思っていたものの、街で見かける星条旗の数は予想していたよりもさらに少なかった。「昨日のレセプションで会った中国人教授は、この付近でこそ星条旗は少ないが、少しドライブして行ってみれば、旗がひらめいている地域を見ることができると、バークレーの例外性を強調していた。」（10月3日）

アフガニスタン攻撃が始まると、学生たちの反戦集会在スプラウル・プラザで開かれた。ここは、まさに60年代のバークレーの諸運動の中心となった空間である。しかし、60年代にここでベトナム反戦の集会被開かれた時と違い、今回は、バークレーであっても、アフガニスタン攻撃を支持する学生集団もかなりの規模で存在していた。「昼休みの抗議集會をのぞきにいく。300人から400人位は集まっている。ただし、皆がアフガニスタン空爆に抗議しているわけではなく、星条旗をかかげてテロをやっつけると叫ぶ愛国派グループも数十人いる。1時頃まで、何人かが入れ替わり立ち替わり演説。（中略）途中愛国派が騒がしくなったこともあったが、全体としては妨害らしい妨害をすることなく、旗を掲げている。集會が終わったあと、反戦派と愛国派の間で

討論の輪がいくつかできる。その内の一つを聞いてみたが、反戦派の30代の男性が、国連を通しての国際的解決をときわめて理路整然と説くのに対し、星条旗の鉢巻をした愛国派は感情的に反応するのみで、その雰囲気との対照性が面白かった。」（10月8日）

9.11以後のアメリカでの愛国心高揚のなかで、アラブ系の人々に対する敵意の広がりがみられたが、それが第二次世界大戦中の日系人に対する敵意を想起させるものであるという見解を、しばしば聞くことができた。「Berkeley Stop the War Coalitionのティーチインを聞きに行く。（中略）参加者は150人から200人というところか。スピーチを行ったのは6人。（中略）3番目 [のスピーカー] は Chizu and Ernie Iiyama という日系アメリカ人の老夫婦で戦争中に収容所に入れられた人々。夫の方は米軍に加わった。彼らは自分たちに加えられた injustice が正されるのに40年以上かかったが、今行われている不正はすぐに正されるべきであると主張した。」（10月9日）

私は、バークレーを拠点にして、週に1度は近くのスタンフォード大学に通う生活をはじめたが、予想していたこととはいえ、雰囲気の違いに驚いた。「スタンフォード大学のキャンパスでは、反戦の意思表示は見られず、逆にアメリカの対テロ戦争を支持する署名を集める機が出ていた。」（10月18日）スタンフォードのキャンパスをずっと観察していたわけではないので、この印象は、私の先入観と、私が訪ねた日がたまたまそうだったことによるのかもしれない。しかしやはり、かなりの違いがあったのではなからうか。

私はまた、サンフランシスコでの反戦集會もものぞいてみた。ドロレス公園のある集會で印象に残った演説の一つは、キング牧師などと一緒に行動したこともあるという大柄な黒人運動家のものであった。この「黒人指導者は、60年代のベトナム反戦運動に触れ、その時に反戦を唱えた者の多くがいまや戦争を遂行していると批判、それはベトナム反戦運動



バークレーでの反戦派と戦争賛成派の討論

の性格そのものに起因していたという。つまり、ベトナム戦争で問われていたものが、ベトナムにとどまらない世界の解放の問題であるということにまで眼をおよぼさないのが、ベトナム反戦運動の姿だったという。そうした反戦運動ではだめだというわけだ。」(10月27日)これは非常に考えさせられる指摘だった。

このような観察をしながら開始したパークレーでの半年間は、私のこれま

での生涯のなかでも最も充実した期間となったが、その間に考えたことの整理をする間もなく、帰国直後から大学行政の仕事に巻き込まれてしまった。この小文を記しつつ、そのことをはなはだ残念に思っている。

記：木畑洋一教授は2005年2月16日付で総合文化研究科長に就任しました。



パークレーでの反戦集会の中の星条旗



サンフランシスコでの反戦集会

研究セミナー参加記

Towards an Asian American Historiography

ロン・クラシゲ セミナー参加記
飯島 真里子

2004年7月12日、南カリフォルニア大学準教授・京都大学フルブライト招聘講師のロン・クラシゲ (Lon Kurashige) 氏によるセミナーが開催された。'Towards an Asian American Historiography'と題されたセミナーでは、これからのアジア系アメリカ研究 (以後AA研究と省略) の新たな展開の必要性が強調された。「新たな」方向性は氏にとっても'Towards' (模索中) であるが、まずそれを見つける手がかりとして、AA研究における大著、ロナルド・タカキ (Ronald Takaki) による*Strangers from a Different Shore* (1989) を具体例として、AA研究の歴史的方法論 (Historiography) の変遷を明らかにした。これは、一般的に論じられるような1960年代後半の反人種差別運動などの社会運動を機に誕生したEthnic Studiesの一部としてのAA研究に新たな評価を与えるものであった。

まず、*Strangers*はConsensus History (大衆の歴史) の伝統を踏襲したといえる。タカキ自身は、Consensus Historyの先駆者であるオスカー・ハンドリン (Oscar

Handlin) の*The Uprooted* (1973)を批判しているが、両者にはいくつか類似点がある。その中で重要なのは、それまで米国史の研究対象とならなかった「移民」に目を向け、アメリカ社会と歴史を論じたことである。ハンドリンは移民たち (主にヨーロッパからの新移民) を新天地における夢の実現の代償として故国の社会・文化・価値観を捨てるはめになった「皮肉な」存在として描きだしたのに対し、タカキはアメリカ社会で人種差別に苦しむ「悲劇的な」存在として表現したが、両者とも移民の目を通してアメリカ社会を批判した。

次に、*Strangers*を1960年代～1970年代に台頭してきたNew Social Historyの視点から考察すると、タカキの立場は非常に微妙である。タカキは、国家や指導者など「上」からの歴史ではなく、マイノリティーや移民などの「グラスルーツ」の人々の歴史を描くという点においてはNew Social Historyの流れをくむといえよう。しかし、多くのAA研究者たちが'Asian American Myth'を作り上げることによって、アメリカ社会での「人種」の重要性の低下を主張していたのに対し、彼はあくまでも白欧主義社会における「犠牲者」としてのアジア系アメリカ人像を提示することで、他のAA研究者たちとは一線を引いていたといえよう。

最後に、1989年に出版された*Strangers*は、Association for Asian American Studies から表彰されると同時に、意外にも白人層からも多くの賞賛を受けた。しかし、この成功は、AA研究を孤立させ、コミュニティーのつながりを重視していた (Self-Help Particularism) 研究者たちの間では、タカキがAA研究の内部資料やコミュニティーを「商品化」したようしか映らなかった。以上のように、*Strangers*はアジア系アメリカ人を対象としながらも、歴史学の方法論を受け継いだものであり、AA研究という枠組みだけでは評価されるものではない。

今回のセミナーにおいては、今後のAA研究の方向性は提示されなかったが、クラシゲ氏が指摘するように、AA研究がEthnic Studiesの一部という研究分野から抜け出し、研究者がより広い範囲での学術的な貢献・方向性を模索しながら個々の研究を行う必要性を痛感した。

(いいじま まりこ：
オックスフォード大学大学院)

政治思想としての経済学 —占領下における「もう一つの」 日米協力

ローラ・ハイン セミナー参加記
川口 悠子



ロン・クラシゲ 南カリフォルニア大学準教授と
司会のゲイル・サトウ 明治大学教授

2004年7月23日、アメリカ・ノースウエスタン大学歴史学部のローラ・ハイン準教授を迎え、講演がおこなわれた。この講演は、戦後初期の日本で活躍した5人の研究者グループの活動に光を当て、政治的・社会的諸問題にかかわる政策決定が政治の領域から徐々に切り離され、専門家によって解決されるべき経済的な問題だと理解されるにいたった過程を問う研究の一部であった。

今回取り上げられたのは、経済学者の大内兵衛 (1919年東大助教授、38年休職・45年復職、50年定年退官) と彼の指導学

生（大森義太郎 [早世]、有澤廣巳、脇村義太郎、高橋正男、美濃部亮吉）によるグループの活動である。彼らは1920年代には名声を確立していたものの、戦争中はマルクス主義者として迫害され、戦後になって活躍の場を得たのであった。戦後の彼らの思想の中心には、近代的社会科学の発展と高度な経済政策こそが、平和で民主的な日本を建設するために重要だという考えがあった。すなわち、戦後日本社会は非政治的であったという通説とは異なって、彼らは社会科学を政治的な枠組みでとらえ、民主的社会のために役立てようとしていたのである。

そのような大内らが戦後初期に深く関与していたのが、インフレ対策と統計の整備であった。彼らは、統計の整備と普及は合理性や近代性への鍵であり、そうした科学的手段によって経済面の再建と同時に政治面での民主主義も達成できると考えていた。たとえば、『経済白書』などを通じて整備された統計データを国民に対し開示することで、政府の透明性を高め、民主化を進展させようと考えていたのである。彼らが統計の整備にことに情熱を燃やした背景には、戦時中には統計の正確さや社会科学的知識全般がないがしろにされていたという事情もあった。

ハイン氏は彼らの活動を肯定的に評価しつつ、それについて考える際には、GHQ/SCAP（連合軍最高司令官総司令部）との協同関係があったことも重視している。GHQ/SCAPは、日本に関する正確な情報を必要としていたので、日本側の統計学者達に技術・待遇などの面で様々な協力をおこなった。それは、GHQ/SCAP



ローラ・ハイン ノースウェスタン大学準教授

と日本側の研究者の意見が合致しない局面もあったとはいえ、政治的問題は科学的思考によって解決できるという思想が、当時、日米双方に共有されていたために可能となったのであった。ハイン氏はこれを「国境を越えたテクノクラートの連帯」と呼び、占領下において、従来指摘されてきたような日米のエリート間の協力関係とはまた異なる形の連帯があったことを示すものだと重要視している。

だが、経済的合理性は民主主義と一致するものであり、それがやがて社会主義に向かうと考える大内らの労農派的思想は、やがて現実社会の動向に裏切られていった。そして、今日の日本は過去の社会的摩擦を経て形成されてきたことは次第に忘れられ、前述したような通説ができあがっていったのだ。

このように講演が締めくくられた後、大内らがGHQ/SCAPと具体的にどのような関係にあったのか、また政治活動についてはどのような姿勢を持っていたのかなどの質問が出され、熱心な議論が交わされた。筆者自身にとっても、当時の研究者が学問と社会との関わりをどのように考えていたのかという点で大変興味深く、また占領下の日米関係や日本の経済思想史の一側面についても大いに勉強になった。なお、この日の講演の内容は*positions: east asia cultures critique* 11.3 (2003)に掲載された“Statistics for Democracy: Economics as Politics in Occupied Japan”を元にしたものであり、氏が2004年に出版した、*Reasonable Men, Powerful Words: Political Culture and Expertise in Twentieth Century Japan*に収録されている。

（かわぐち ゆうこ：東京大学大学院）

奴隷制の歴史と歴史家の営み

アイラ・バーリン セミナー参加記
大八木 豪

2004年7月28日、記録的猛暑の中、メリーランド大学歴史学部のアイラ・バーリン（Ira Berlin）教授を迎えてセミナーがおこなわれた。司会の遠藤泰生東京大

学教授の紹介をうけた後、バーリン教授は、現在のアメリカ合衆国においても奴隷制の存在が大きいことを文化的、政治的事例をひきながら述べた後、奴隷制をめぐる二つの主題をあげたうえで奴隷制を歴史化（historicization）することについて説明をおこない、そのことと人種の歴史化との関係を解説して結びとした。その後、35人ほどの参加者との間で活発な議論がなされ、約2時間のセミナーは幕を閉じた。筆者も含めて数多くの大学院生が参加している中、数々の素晴らしい仕事を成し遂げてきた歴史家が、奴隷制というそれ自体重要な歴史的事象について説明を加えながら、歴史家の仕事とはどのようなものであるのかということをもあわせて示した点で、このセミナーの意義はとても大きなものとなったといえよう。



アイラ・バーリン メリーランド大学教授

21世紀になった現在のアメリカにおいて、奴隷制は、映画・テレビドラマ・博物館展示・雑誌などにおいて主題となることが多く、それにとまってしばしば話題にあがるという。また、トマス・ジェファソンとサリー・ヘミングスとの関係についての論議もその傾向を強めている。その一方で、クリントン大統領・ブッシュ大統領が相次いでアフリカ西海岸にある、かつての奴隷貿易の根拠地を訪問したことは、奴隷制がいかに現在でも政治的な主題になっているかを物語っている。そして、奴隷制は、アメリカの文化や政治だけでなく、経済、そして原理をも形づくったのだから、その存在なしにはアメリカ史を理解することはできないのであると、バーリン教授は述べた。

その奴隷制は、見方によって、二つの主題を持ちうる。一つは、奴隷制が肉体的・精神的に奴隷を苦しめ、抑圧する制度であったという主題であり、もう一つは、このような非人道的な制度に奴隷が対抗することで、さまざまな創造性が生まれたという主題である。この二つの側面を考えると、奴隷制を歴史化すること、すなわち、奴隷が生き様々時間・空間を考慮しながら、奴隷制を歴史的文脈に置いて考察することが重要になってくる。このことによって、奴隷の生きた多様な生活が明らかになり、また、大西洋で結ばれる各地の奴隷制の比較が可能になるからである。また、この奴隷制の歴史化の過程で、合衆国において奴隷制が人種を語る言葉となったことが理解されうるし、アメリカにおける人種の歴史化も同時になされるのであると、バーリン教授は結論づけて、レクチャーを終えた。

このセミナーに参加して、二つの点が印象に残った。一点目として、奴隷制がアメリカにおける人種を語る言葉となった、というバーリン教授の指摘が挙げられる。奴隷制を専門的に研究していない自分にとっても、もっともだと思えると同時に、他の人種をめぐる歴史的事象（例えば、第二次世界大戦中の日系アメリカ人の強制立ち退き・収容など）と奴隷制の歴史を通じて築かれた人種との関連はどのようなものであるのか、を考察する必要があるようにも思われたからである。二点目には、奴隷制にたいして複合的な視点をあわせて持つ必要性を、バーリン教授が説いたことが挙げられる。歴史家として自己言及的態度を欠かさずしながら、歴史家の仕事とその意義を示す姿勢に、まだ研究者として駆け出しの大学院生である筆者は感銘を受けたからである。そして、この文章を書いている今でも、生暖かい夏の夜に、帰り道を一人歩きながら考えたこれらのことに励まされると同時に多少の緊張感を覚える。

（おおよぎ とう：東京大学大学院）

進歩派国際主義 の伝統

アラン・ダウリー セミナー参加記

木下 順



アラン・ダウリー
ニュージャージーカレッジ教授

アラン・ダウリーは、労働史の研究者として出発し、マサチューセッツ州リンの製靴労働者について研究した『階級と地域社会*Class and Community*』によって若くして高い評価を得た。

今回のセミナー「進歩的な国際主義を求めて」は、近著『世界を変える*Changing the World*』をもとに、1914年から1948年までの進歩派progressivesの対外政策を取上げた。彼の立論の特徴は、企業に対する規制や社会政策をつうじて社会問題を解決しようとするさまざまな運動に焦点を当て、トルーマン政権の誕生と対ソ強硬路線の台頭によって実現を阻まれた、アメリカ史の可能性の虹（スペクトラム）を描こうとしたところにあると思われる。

以下の要約は、講演と質疑応答とを、ひとつの流れとしてまとめたものである。

* * *

進歩派は革新主義progressivismと字面が酷似し、また人的にも重なるところがあるけれども、両者は社会問題に対する姿勢が根本的などころで異なる。革新派といわれるセオドア・ルーズベルトにしてもウッドロー・ウィルソンにしても、政治家として時代の流れに乗って社会改良を綱領に掲げはしたけれども、それを徹底的に追及したわけではなかった。

その意味で、ここでいう進歩派は、ジェファーソン民主主義の流れを汲む労働騎士団およびAFL（アメリカ労働総同盟）の指導者ジョージ・マクニール、セツルメント運動の創始者で平和主義者のジェーン・アダムズ、NAACP（全米黒人地位向上協会）の創設者ウィリアム・デュボイスなどである。

彼らは、国内における社会問題を解決するために、それぞれ労働運動、女性運動、黒人運動を拠点に社会運動を推進した。これら多彩な社会運動を背景に、たとえばロバート・ラフォレットは大統領候補に名乗りをあげたのである。

1920年代には、革新主義の遺産や、第一次大戦時の労働保護立法や労働調停制度が、連邦政府によってご破算にされ、市場主義的な政策が展開された。

しかし1930年代にニューディール政策が展開されるにともない、進歩派の影響力が連邦政府の中枢にも及ぶことになった。ワグナー法の制定はその象徴である。アダムズの盟友であったフランシス・パーキンズは労働長官に任命されたし、繊維労働組合のシドニー・ヒルマン委員長は大統領の片腕として戦時経済に大きな影響力をもった。

こうして、第一次大戦後とは異なって、第二次大戦後には戦時社会政策の基本的な部分が継承されたのである。

戦争直後の世界体制はアメリカ合衆国を基軸として構築されはじめた。暫くのあいだ、それはウィルソン流の国際主義を理念としており、ソ連など共産主義国の国際主義とも協調するものであった。そのもとに国際連盟は発足したし、WFTU（世界労働組合連盟）もヒルマンらの努力により超党派で結成され、また今日では国際金融資本の代理人のようにも見えるIMF（国際通貨基金）すら、通貨の安定によって資本の強欲な運動を抑制して社会の安定を目指す、いわば国際的な社会政策の推進力として期待されつつ発足した。

さらに重要なことは、20世紀初頭から各分野で発展しつつあった社会運動団体が、国際的な活動を繰り広げたことである。アダムズらの創始したWILPF（平和と自由国際女性同盟）、デュボイスらの推進したパン・アフリカ会議、あるいはウォルター・ルーサーらを中心とするWFTUなどがそれである。これらの団体

は、リベラルも共産主義者も含む幅広い国際主義の連合体であった。

このように、20世紀の前半をつうじて、進歩派は、リベラル派と共産主義者との橋渡しをしつつ、国内の社会政策だけではなく、国際問題に対しても積極的に活動を展開した。

だが、この潮流は、ジョージ・ウォレスが1948年の大統領選挙に破れたことによって、挫折した。政権に就いたハリートルマンは共産主義諸国に対して封じ込め政策をおこない、世界は冷戦時代に入る。リベラル派や共産主義者を糾合した国際団体は、旗幟を鮮明にすることが求められ、いずれかの陣営を選ぶか、あるいは分裂していった。

その結果は、ふたつの悲劇となってあらわれた。ひとつは、多くの人々の血を流したベトナム戦争である。もうひとつは、進歩派の国際主義者であったキング牧師が暗殺されたあとなどに全米各地に起こった人種暴動である。

このような負の遺産を想うとき、進歩派国際主義の歴史的意義を再評価すべきである。この潮流は、ニューディール期を除いては連邦政府の政策にたいして大きな影響力をもたなかったけれども、新植民地主義的で武断的な政権に代わる有力な代替策でありつづけた。

こんにち、共産主義が壊滅し、リベラル派も追い詰められている。他方で「テロリストとの戦い」の名のもとに武断主義が復活しつつある。このような時にこそ、国内での社会問題の解決を追い求めつつ、しかもそれを対外進出によって解決しようとはしなかった、合衆国における進歩派国際主義の意義があらためて見直されるべきではないだろうか。

(きのした じゅん：国学院大学教授)

フェミニズムの歴史・現在・未来

エステル・フリードマン セミナー参加記
浅井 理恵子

2004年10月13日、スタンフォード大学のエステル・フリードマン教授によるセミナーが行われた。フリードマン氏は30



エステル・フリードマン スタンフォード大学教授と瀧田佳子教授

年近くアメリカ女性史研究に携わってきた、この分野の草分けともいえる存在である。今回の講演は、2002年に出版された*No Turning Back: The History of Feminism and the Future of Women* (2005年2月に邦訳『フェミニズムの歴史と女性の未来』が刊行)の内容に沿って進められた。フェミニズムの歴史を跡付け、学際的かつ国際的な視角から現在の動向と未来への展望について語る姿は力強く、社会変革力としてのフェミニズムの可能性を再認識させるものだった。

フリードマン氏はまず、近年主流のメディアで盛んに喧伝されている「フェミニズムの死」に異議を唱えた。フェミニズムは使命を果たし終えたのではなく、かつてなく社会に浸透し政治の主流にさえなりつつある。国際的には、従来は「急進的」とみなされた女性解放のアジェンダが今日では一般大衆の関心事となっているし、アメリカ国内では、ローカル・フェミニズムのネットワークが着実に育っているという。このような勢いを鑑みると、女性の人権・公民権を求める運動はもはや後戻りすることはない、と氏は明言する。

以上のような理解を踏まえ、本題に入った。フリードマン氏の問題関心は、組織化された運動としてのフェミニズムの歴史的淵源を明らかにすることであり、その答えは明快だ。氏によると、民主主義の発達と資本主義の勃興が決定的であったという。まず民主主義であるが、この近代政治思想が内包する矛盾が女性解放への道を開いた。すなわち、自然権という概念は同時に「自然な性」「自然な人

種」を規定し、これらのグループを生物学的差異ゆえに市民から除外することを正当化した。とりわけ、参政権からの女性排除は、普遍性を標榜する民主主義の矛盾を示す象徴として、フェミニストたちの批判的となったのである。いまひとつ、フェミニズムを生きさせた歴史的契機は経済システムの変換だった。市場経済の誕生により女性もまた労働者となったが、低賃金、女性だけの職場、さらには労働と家事の二重負担によって男性への経済的依存が深まり、結果として家父長制が維持・強化された。こうした不平等の恒常化に直面し、女性たちは市民・労働者として社会への完全な参加を強く求めるようになったのである。

続いて、フリードマン氏はフェミニズムが展開した多様な戦略や、歴史の推移とともに変化してきた達成課題について論じた。西洋のみならず、共産圏や第三世界のフェミニストにまで目配りしながら、リベラル・フェミニズム、社会主義、母性主義という互いに重なり合う3つの戦略を説明したあと、現在のリベラル・フェミニストがinterdependence (相互依存) という新しい概念・実践を提唱していることを紹介した。さらに、非白人および旧植民地出身のフェミニストによる異議申し立てや、女性解放運動の国際化によってフェミニズムはアジェンダの再検討・再定義を迫られ、西洋の視点に立脚した従来の達成課題が脱中心化されていったと述べた。このようにフリードマン氏は、フェミニズムの生命力の源泉はその順応性にあると指摘する。時代の要請に合わせ自在に変化する戦略の柔軟性

を保ち続ける限り、フェミニズムはこれからも社会革新の大きな推進力であり続けるという。

講演に続く質疑応答では、フェミニズム発展の必要条件としてフリードマン氏が挙げた民主主義と市場経済をめぐって、活発な意見が交わされた。この「西欧近代システム」に依拠した命題が普遍性を持ちうるのか、議論を尽くす必要があるだろう。フリードマン氏とフロアのやりとりを聞きながら、フェミニズムの来歴を比較史的な視点で検証することの重要性をあらためて強く感じた。

(あさい りえこ：
津田塾大学非常勤講師)

セーラム魔女裁判の 新しい物語への道程

メアリー・ベス・ノートン セミナー参加記
荒木 純子

2004年12月14日、21世紀COEプログラム「共生のための国際哲学交流センター」との共催により、コーネル大学メアリー・ベス・ノートン教授のセミナーが開催された。ノートン教授といえば、何回も重版され、たいへんな売れ行きのアメリカ史の教科書*A People and a Nation: A History of the United States* (邦訳『アメリカの歴史』全6巻、1996年、三省堂)の共編著者であり、また1812年戦争以前のアメリカ史、とりわけ女性史の研究者として知らぬ者はないだろう。"Rethinking the Metanarrative of Salem Witchcraft"というテーマで開かれた今回のセミナーでは、最新刊にあたる*In the Devil's Snare: The Salem Witchcraft Crisis of 1692* (2002)の出版までのリサーチの軌跡を熱く語ってくれた。

この本が出版されたとき、「彼女のよ様な研究者でも今頃！」と欣喜雀躍の思いだったことを覚えている。というのも、「今さら"Salem Witchcraft"など研究して何になるのか」とおっしゃる方が私のまわりに多いからである。ノートン教授自身も今回リサーチをしている間、同じことをいわれ続けたという。それでもノートン教授は、この一連のセーラムでの魔術騒動を「告訴された女性たちの裁判につ

いての物語」と大きくとらえ、史料を洗い直してみる。あらゆる人々によって語り継がれてきた結果、伝説に近いものにすらなっているこの事件は、実は、植民地の歴史において女性が公的な場、政治的な場で大きなインパクトを与えた初めてのできごとであったことが知られている。つまり、公の場で初めて男性がまともに女性の声に耳を傾けた重要な事件であったといえるのだ。この事件の全貌を把握するためにノートン教授がまず採った手法は、人々から魔女だという疑いをかけられた女性たちが有罪となり処刑されるまでの、できごととしての時系列と、裁判記録に現れる記述上の時系列とを比較することだった。すべての裁判記録を読み整理した結果、その二つの時系列の齟齬が大きいことがわかり、このことは裁判を行うための証拠集めに植民地側が苦心したことを示していると教授は結論付けるに至った。

一方、この大騒動について、当時の人々はどうのように語りあっていたのだろうか。それがノートン教授の次の追究課題であった。しかし、これだけ大きな事件であったと考えられるのに、このセーラムの事件に触れた同時代の記録は不思議なほど少ない。史料として、例えば裁判に関わった人の日記が遺族によりその近辺の時期だけ破棄されていたり、あるいは単に散逸していたりして、役立つものが少ないということは考えうる。しかしそうした可能性を差し引いても、この魔術のできごとに関する記録は意外なほど残っていない。むしろ、大西洋を往来するものも含め、当時の書簡上ではマサチューセッツ植民地の北端における、ネイティブ・アメリカンとの戦争ばかりが話題にのぼっていたのである。

ところが、ノートン教授は地道な一次史料の精読を続けていく途中、あるときふと、ネイティブ・アメリカンとの戦いに破れた生き残りや手紙に書かれている人物が、セーラムの騒動で魔女として訴えられた者に多いことに気づいたのである！ そのときの思いを「感動」ということばで表現するには余りあるだろう。その発見をきっかけとして、互いの関連性が薄そうに見える膨大な数のばらばらの裁判の事例は、セーラムの事件が語る白人植民地社会についての大きな物語の、あるべきところにうまくおさまって

いったのである。教授の語るその劇的な発見に、われわれもまた、いわば歴史研究の醍醐味を追体験することができたのだ。こうしてこの後、ノートン教授はネイティブ・アメリカンとの戦争に関わった人々を調べ、魔女の告発に関連づけていくことで、白人はネイティブ・アメリカンには負けたものの、植民地を襲う悪魔には勝利したという物語、*In the Devil's Snare*を完成させたのである。

そもそもこの研究はノートン教授の2冊の有名な女性史研究書、*Liberty's Daughters: The Revolutionary Experience of American Women, 1750-1800* (1980)と*Founding Mothers & Fathers: Gendered Power and the Forming of American Society* (1996)との三部作の中間に位置するものとして始めたものだという。結果的に違う方向に向かったが、この植民地女性史三部作を完結させるべく、17世紀後半から18世紀前半にかけてのリサーチを続けると、セミナー後のインフォーマルな会食でノートン教授は快活に語っていらっしやう。その研究書の出版を心待ちにしながら、地道にこつこつと自分の研究も続けようと思ったのだ。

(あらき じゅんこ：CPAS研究機関研究員)



メアリー・ベス・ノートン
コーネル大学教授

2004年度研究活動報告

I. 研究セミナー

テーマ	講師 (所属機関)	司会	期日	共催者
American Copyright and American Culture: A Perfect Fit or a Fight to the Death?	Laura J. Murray (Queen's University, Canada / Kwansei Gakuin University)	矢口祐人	2004.4.23	アメリカ学会
Four Decades of Poetry: A Reading & Performance	Jerome Rothenberg (University of California, San Diego)	クライヴ・コリンズ	2004.5.24	アメリカ学会
The Response to American Affluence at the End of the 20th Century	Daniel Horowitz (Smith College)	矢口祐人	2004.6.4	アメリカ学会 21世紀COE「共生のための 国際哲学交流センター」 (UTCP)
Race, Region, and Violence in America South by West: Sectional Alliances and National Belonging in Early Twentieth-Century America 'Go Safely': The Country Music Industry Responds to Rural AIDS	John Howard (King's College, University of London) Meredith Raimondo (Oberlin College)	矢口祐人	2004.6.11	アメリカ学会 UTCP
Media and Trauma: Contesting the Space of Ground Zero in New York	Marita Sturken (University of Southern California)	能登路雅子	2004.6.16	アメリカ学会 UTCP
Classic American Popular Songs of the Golden Era: 1925-1950	Allen Forte (Yale University)	遠藤泰生	2004.6.18	アメリカ学会
Taking Possession: Caribbean Imagination and Caribbean Space	Laurence Breiner (University of Tokyo / Boston University)	シーラ・ホーンズ	2004.6.30	アメリカ学会 UTCP 基盤研究(A)(2)「奴隷制 社会における拘束型労働 の実践と記憶、ならびに 制度正当化の言説」
Towards an Asian American Historiography	Lon Kurashige (University of Southern California / Kyoto University)	ゲイル・サトウ (明治大学)	2004.7.12	アメリカ学会 基盤研究(A)(1)「アジア 系アメリカ人の越境と文 化混合に関する比較研究」
Social Scientists vs. Bureaucrats: A Different Japanese-American Alliance in Occupied Japan	Laura Hein (Northeastern University)	油井大三郎	2004.7.23	アメリカ学会 基盤研究(A)(1)「アジア 系アメリカ人の越境と文 化混合に関する比較研究」
The Contemporary Crisis in Race in the US and the History of Slavery	Ira Berlin (University of Maryland)	遠藤泰生	2004.7.28	アメリカ学会 UTCP 基盤研究(A)(2)「奴隷制 社会における拘束型労働 の実践と記憶、ならびに 制度正当化の言説」
The Search for Progressive Internationalism, 1914-1948	Alan Dawley (College of New Jersey)	遠藤泰生	2004.8.24	アメリカ学会 日本学術振興会・人文・社 会科学振興のためのプロ ジェクト研究事業領域II 「平和構築に向けた知の 再編」/「アメリカ研究」 の再編
No Turning Back: The History of Feminism and the Future of Women	Estelle B. Freedman (Stanford University)	瀧田佳子	2004.10.13	アメリカ学会 UTCP
Rethinking the Metanarrative of Salem Witchcraft	Mary Beth Norton (Cornell University)	瀧田佳子	2004.12.14	アメリカ学会 UTCP 初期アメリカ学会
A Night at Delmonico's: American Identity and Baseball in the Late Nineteenth Century	Thomas Zeiler (University of Tokyo / University of Colorado at Boulder)	能登路雅子	2005.1.24	アメリカ学会
American Empire: Cultural Aspects Regeneration Through Empire: The Emergence of America, 1877-1920 European Views of American Imperialism, Cultural and Political	T. J. Jackson Lears (Rutgers University) Rob Kroes (University of Amsterdam)	遠藤泰生	2005.3.15	基盤研究(A)(2) 「アジ アにおけるアメリカ文化 外交の展開と変容」 アメリカ学会 UTCP 日本学術振興会・人文・社 会科学振興のためのプロ ジェクト研究事業領域II 「平和構築に向けた知の 再編」/「アメリカ研究」 の再編 基盤研究(A)(1)「グロー バル化時代における「ア メリカ化」と反米主義の 国際的比較研究」 基盤研究(A)(2)「グロー バリゼーション下にお ける地域形成と地域連関に 関する比較研究」

II. シンポジウム

東京大学・MIT合同展示記念シンポジウム 「彼理(べるり)とPerry——交錯する黒船像」

日時：2004年10月2日(土) 15時～17時30分
場所：東京大学大学院総合文化研究科学際交流ホール
プログラム：
司会…遠藤泰生
(東京大学アメリカ太平洋地域研究センター教授)
挨拶…山本 泰
(東京大学大学院総合文化研究科副研究科長)
報告…三谷 博
(東京大学大学院総合文化研究科教授)
「『紀憂』と『夏虫の水の間』—19世紀前半の日本」
加藤祐三(元横浜市立大学学長)
「史上初の日米交渉」
富澤達三
(神奈川大学21世紀COEプログラムポストドクター)
「黒船かわら版とそれ以前」

III. 展示会

東京大学・MIT合同展示 「彼理(べるり)とPerry——交錯する黒船像」

会期：2004年10月3日(日)～14日(木)
場所：東京大学教養学部美術博物館
共催：アメリカ・マサチューセッツ工科大学(MIT)
東京大学教養学部美術博物館
「黒船とサムライ」巡回展示日本実行委員会
科学研究費補助金(基盤研究(A)(2))
「アジアにおけるアメリカ文化外交の展開と変容」
科学研究費補助金(基盤研究(A)(1))
「アジア系アメリカ人の越境と文化混合に関する比較研究」
後援：東京大学史料編纂所
外務省
アメリカ大使館
アメリカ研究振興会
国際交流基金日米センター
読売新聞社
入場者数：1,315名

IV. 研究プロジェクト

- 文部科学省研究費補助金・基盤研究(A)(1)「アジア系アメリカ人の越境と文化混合に関する比較研究」(代表：油井大三郎)
- 文部科学省研究費補助金・基盤研究(A)(2)「アジアにおけるアメリカ文化外交の展開と変容」(代表：能登路雅子)
- 日米文化教育交流会議(カルコン) デジタル教材開発WGへの協力(代表：能登路雅子)
- 21世紀COEプログラム「共生のための国際哲学交流センター」への協力

V. 出版活動

- 林文代『迷宮としてのテキスト——フォークナー的エクリチュールへの誘い』(アメリカ太平洋研究叢書)、2004年5月、東京大学出版会
- 遠藤泰生・油井大三郎編『太平洋世界の中のアメリカ——対立から共生へ』(講座「変貌するアメリカ太平洋世界」全6巻、第1巻)、2004年10月、彩流社
- 庄司興吉編『グローバル情報化とアメリカ・アジア太平洋』(講座「変貌するアメリカ太平洋世界」全6巻、第5巻)、2004年11月、彩流社
- 瀧田佳子編『太平洋世界の文化とアメリカ——多文化主義・土着・ジェンダー』(講座「変貌するアメリカ太平洋世界」全6巻、第6巻)、2005年2月、彩流社

- 五十嵐武士編『太平洋世界の国際関係』(講座「変貌するアメリカ太平洋世界」全6巻、第2巻)、2005年2月、彩流社
- 山本吉宣編『アジア太平洋の安全保障とアメリカ』(講座「変貌するアメリカ太平洋世界」全6巻、第3巻)、続刊予定、彩流社
- 松原望・丸山真人編『アジア太平洋環境の新視点』(講座「変貌するアメリカ太平洋世界」全6巻、第4巻)、続刊予定、彩流社
- 『CPAS Exhibition 2004: 彼理とPerry——交錯する黒船像』、2004年10月、アメリカ太平洋地域研究センター
- 『CPAS Newsletter』Vol.5, No.1(2004年9月)、No.2(2005年3月)
- 『アメリカ太平洋研究』第5巻、2005年3月

VI. センター所属教員の本年度の研究活動

◆油井大三郎

編著

- 『新訂 アメリカの歴史』放送大学教育振興会(2004年)
- 「アメリカニゼーションの光と影」、「戦後史のなかの日米交錯」『週刊朝日百科115・日本の歴史・現代5, アメリカ——日米交錯の諸相』朝日新聞社(2004年8月)

共編著

- 「太平洋共同体の可能性」を分担執筆、遠藤泰生・油井大三郎編『太平洋世界の中のアメリカ』彩流社(2004年)

分担執筆

- 「世界史認識と平和」藤原修・岡本三夫編『いま平和とは何か』法律文化社(2004年)

書評

- 「忘れられた戦争の記憶と日英対話」木畑洋一・小菅信子・フィリップ・トウル編『戦争の記憶と捕虜問題』東京大学出版会、『東京大学教養学部報』第471号(2004年1月14日)

その他

- 事典「移民とディアスポラ」小田隆裕ほか編『事典 現代のアメリカ』大修館(2004年)、555-564頁。
- 「彼理(べるり)とPerry(ペリー)——交錯する黒船像」展によせて『東京大学教養学部報』第477号(2004年10月13日)

◆木畑洋一

編著

- 『講座戦争と現代2 20世紀の戦争とは何であったか』大月書店(2004年)

分担執筆

- 「歴史学と修正主義」史学会編『歴史学の最前線』東京大学出版会(2004年)

書評

- 北原靖明『インドから見た大英帝国 キプリングを手がかりに』昭和堂、『英語青年』1863号(2004年5月)

その他

- 「バークレー 2001年10月」『CPAS Newsletter』5巻2号(2005年3月)、15-16頁

発表

- 日本西洋史学会第54回大会(於東北学院大学)シンポジウム「帝国の終焉と国際秩序の再編—アジアをめぐる欧米諸国の相克」で報告：「イギリス帝国の崩壊とアメリカ—1960年代アジア太平洋における国際秩序の変容」(2004年5月)
- 日英シンポジウム"Anglo-Japanese Relations and the International Politics in East Asia"(於LSE, London)で報告：Japan and the San Francisco Peace Conference: Anglo-Japanese Relations and Japan's Return to Asia(2004年7月)

- 第5回東アジア4大学フォーラム(於北京大学)で報告：「東京大学における東アジア文明をめぐる教育の現状と4大学間の協力に向けての方向性」(2004年11月)
- 東京大学リベラルアーツ南京交流センター開所式(於南京大学)で講演：「東アジアにおける教養教育——東京大学教養学部の経験から」(2004年11月)

◆遠藤泰生

共編著

- 「歴史」「用語集」を分担執筆、古谷句・遠藤泰生編『新版 アメリカ学入門』南雲堂(2004年)
- 「序論——太平洋世界を包む複合的な想像力を求めて」「第一章 太平洋世界の相互イメージ——19世紀のアメリカと日本における太平洋の表象」を分担執筆、遠藤泰生・油井大三郎編『太平洋世界の中のアメリカ』彩流社(2004年)

分担執筆

- 「3章 植民地時代の北アメリカ」「4章 大陸国家アメリカ合衆国の成立」油井大三郎編『新訂 アメリカの歴史』放送大学教育振興会(2004年)

書評

- 三谷博『ペリー来航』吉川弘文館(2003年)、『東京大学教養学部報』第473号(2004年4月1日)

その他

- シンポジウム報告書、『日米関係の軌跡と展望』、日米交流150年委員会・国際交流基金日米センター、2004年7月、総117頁、「第一部 150年の日米交流」7-23頁を五百旗頭真、マイケル・オースリンと分担執筆。
- 展示解説、『CPAS Exhibition 2004: 彼理とPerry——交錯する黒船像』、2004年10月、アメリカ太平洋地域研究センター、8-22頁。
- 「虹のかなたに アメリカン・クラシック・ポピュラーソング考——アレン・フォート・セミナー参加記」『CPAS Newsletter』5巻1号(2004年9月)、9-10頁。

発表

- 講演、日米交流150年記念シンポジウム「日米関係の軌跡と展望」、「第一部 150年の日米交流」、2004年4月3日、日米交流150年委員会・日米センター共催、横浜開港記念会館。
- ディスカッション、日本アメリカ史学会第2回例会、「近世大西洋世界における「移動」——奴隷制・奴隷貿易を中心に」、2004年12月4日、明治大学駿河台キャンパス。

◆矢口祐人

分担執筆

- 「ハワイの音楽」後藤明・松原好次・塩谷亨編『ハワイ研究への招待』関西学院大学出版会(2004年)、59-71頁。
- 「ナサニエル・エマソンのフラ—エスノグラフィック・アーカイヴスをめぐって」瀧田佳子編『太平洋世界の文化とアメリカ』彩流社(2005年2月)

その他

- 事典「美術館・博物館」小田隆裕ほか編『事典 現代のアメリカ』大修館(2004年)、464-474頁。

◆荒木純子

編集

- 『CPAS Exhibition 2004: 彼理とPerry——交錯する黒船像』、2004年10月、アメリカ太平洋地域研究センター

その他

- 「多言語で探るアメリカの歴史と文化——マイクロフィルムコレクションJapanese Camp Newspapersを中心に」『CPAS Newsletter』5巻1号(2004年9月)、11頁。
- 「セラム魔女裁判の新しい物語への道程——メアリー・ベス・ノートンセミナー参加記」『CPAS Newsletter』5巻2号(2005年3月)、21頁。

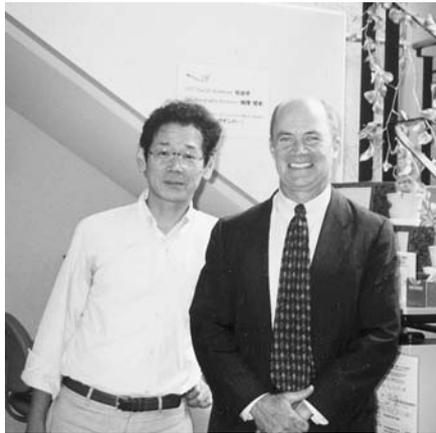
センター長の交替

◆2005年4月1日より、アメリカ太平洋地域研究センター長に、能登路雅子教授（総合文化研究科地域文化研究専攻）が就任します。

来客の紹介

◆2004年7月13日、豪日交流基金事務局長レオニー・ボクステル氏が来訪。

◆2004年8月30日、ハーヴァード・イェンチン研究所事務局長ピーター・ケリー氏が来訪。東京大学大学院総合文化研究科との交流の窓口としてアメリカ太平洋地域研究センターをパートナーと位置づけることを、山本泰総合文化研究科副研究科長と話し合う。



山本泰 総合文化研究科副研究科長と
ピーター・ケリー ハーヴァード大学
イェンチン研究所事務局長

- ◆2004年10月5日、下田市役所市長公室開港150周年記念事業係山田吉利氏が来訪。
- ◆2004年10月9日、長崎大学図書館館長安永勉氏、同情報管理班長吉村淳氏が来訪。
- ◆2004年10月13日、横須賀市役所企画調整部文化振興課穴戸孝全氏が来訪。
- ◆2004年10月14日、函館市教育委員会生涯教育部長須田正晴氏、同スポーツ振興課木下松志氏が来訪。
- ◆2004年10月14日、マサチューセッツ工科大学の宮川繁教授が来訪。



油井大三郎 CPASセンター長と宮川繁 MIT教授
（「彼理とPerry」展にて）

新スタッフの紹介

◆2004年10月1日付けで、渡邊貴子助手が着任しました。



渡邊貴子

◆2005年1月1日付けで、岡崎真弓司書が着任しました。



岡崎真弓

アメリカ太平洋地域研究センター運営委員会（2004年度）
大学院総合文化研究科・教養学部

(センター長・運営委員長)	油井 大三郎	教授
(副研究科長)	山本 泰	教授
(言語情報科学専攻)	西中村 浩	教授
(言語情報科学専攻)	林 文代	教授
(超域文化科学専攻)	山下 晋司	教授
(超域文化科学専攻)	中島 隆博	助教授
(地域文化研究専攻)	中井 和夫	教授
(地域文化研究専攻)	能登路 雅子	教授
(国際社会科学専攻)	石井 明	教授
(生命環境科学系)	友田 修司	教授
(関連基礎科学系)	岡本 拓司	講師
(広域システム科学系)	谷内 達	教授
(委嘱委員)	木村 秀雄	教授
(センター)	木畑 洋一	教授
(センター)	遠藤 泰生	教授
(センター)	矢口 祐人	助教授
大学院法政政治学研究所・法学部	五十嵐 武士	教授
	寺尾 美子	教授
大学院人文社会系研究科・文学部	平石 貴樹	教授
	吉野 耕作	助教授
大学院経済学研究所・経済学部	石原 俊時	助教授
	大森 裕浩	助教授
大学院教育学研究所・教育学部	矢野 眞和	教授
社会科学研究所	Noble, Gregory	教授
情報学環・学際情報学府	田中 秀幸	助教授
	以上25名	

CPAS ニュースレター Vol. 5 No.2

平成17年3月31日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科附属

アメリカ太平洋地域研究センター

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1

TEL 03-5454-6137 FAX 03-5454-6160

http://www.cpas.c.u-tokyo.ac.jp/

編集：矢口祐人（編集長） 荒木純子

制作：株式会社 JTBコーエイ

〒174-0042 東京都板橋区東坂下2-2-15

TEL 03-5970-9506 FAX 03-5970-9526